



私の見てきた  
アメリカの幼児教育  
兒 玉 省

筆者は昨年一月末から四月末までの間アメリカを視察してきた。倉橋先生からその時に見てきたアメリカの幼児教育に就て書けとの仰せつけを受けた。元來筆者が昨年アメリカを視察した時には、日本心理学会と日本応用心理学会から、臨床心理学の分野を見てくるようにとの言いつけがあつたので、幼児教育の視察は勢い二次的なものとなつた。ただ筆者が従来担当している学科の関係上、幼児教育に対する関心は視察期間中ズツと持ちつづけられてはいたけれども、幼稚園やナーサリースクールでも三つ見たいと思つたところは、一つになり、訪問していろいろ話をきいてきたと思つたところも訪問できないで終つて了つた。そういう意味からは、幼児教育の視察としては甚だ不完全であるが、倉橋先生のおいいつけに従つて見てきたまゝを——多少古くなつたが——書きつづることにした。

首都ワシントンで

二月の下旬首都ワシントンにつくと、約二週間の滞在中、臨床心理方面の視察のかたわら、是非一度ナーサリー・スクールを見たいと思つた。というのは、三、四年前司令部の資料の中で読んだものの中に、戦前まで公立教

育は下から上へ上へと伸びて行つた。即ちハイスクールが無料の公立教育になつていたのが、更に上に伸びて短期大学にまでも及ぼうとするような形勢を示していた。然し戦時中家庭の婦人勞働が動員せられるにつれて、幼児の教育と養護を担当する施設としてナーサリースクールが必然的に増設せられて行つた。そして嘗ては有産階級的な色彩を持つていたナーサリースクールは普通一般の家庭のための施設となつた。その多くは公立として開設せられたが、これは公立教育が小学校から下に伸びて行つたもので、今度の戦争がもたらした一つの遺産となるであろう。というような意味のことを讀んだことがある。それで筆者は、アメリカには、戦時中から戦後にかけて、うんとナーサリースクールが殖えていくことであろう。それも新しい公立的なものであると期待してやつてきた。この心持ちから、首都ワシントンに滞在中に是非一つ二つサンプルを見て置きたいと思つて、筆者らを世話してくれた Federal Security Agency の人達に、適当なナーサリースクールを紹介してもらふことを依頼した。ところがその簡単に見つからないようで、漸く一つだけ、それも相当離れた所にあるものを見つけた。

紹介して貰つた所はイングラハム街と第九

街にあるトルーステル実験学校の幼稚園であつた。行つて見ると体育館兼用の広々とした保育室に可愛い五才児が十人余り一人の先生と一緒に絵本を見ている所であつたが、筆者が室に入るとみんな筆者の方を振り向いた。先生が子供に向つて「今日お客さんがあると云つておつたでしょう」と云うが否や、子供たちは筆者に向つて次から次と質問を浴せる。

「どこから来たの?」……「東京から」。

「東京でどこにあるの?」……「ココからうんと遠いと」。

「それワイリッピンにあるの?」……「それは日本にあるのだよ。日本でどこにあるか知つてる?」

教師がこの質問を引きとつて「みなさんどこにあるか知つていますか」ときいたが、みんな「知らない」と答えた。まだ子供は質問して来る。

「どうして(どういう方法で)ここにきたの?」……「飛行機できた」日本の羽田という飛行場を立つてシャトルという所に着いて、それからまた飛行機でワシントンの国立飛行場に着いたことを話すと、先生がまた「シャトルのこときいたことがありますか」と尋ねる。三、四人の子供を除いて

みんな手を上げて「ハイ」と云つた。

筆者はこの学校で筆者を案内してくれた先生に、ワシントンでナーサリースクールで学ぶ所はありますか? と尋ねたら、先生は「そういうものは戦争中はあちこちにあつたようだが、今はなくなつてしまつていゝ」といふ答であつた。これは筆者にとつて全く意外な答であつた。ナーサリースクールはうんと殖えているだろう。しかも公立のものが沢山あるだろうと予想してきた筆者にとつては、まるで狐につままれたような感じであつた。

### コロンビア大学附属

ワシントンから紐育に行つたが、ここにも余り沢山はないようである。少くとも、普通の人にきいたぐらいでは一向にそんなものがあるのかどうかさえも知らない。でコロンビア大学のチーチアスカレッツチに行つてラッセル・アグネス・スクール (Russell Agnes School) のナーサリー・スクールを見学した。ラッセル・アグネス・スクールというのは、コロンビアの教職員及び大学院の学生の子供だけを収容している学校で、チーチア

ース・カレッツチ附属のものホレース・マン実験学校は一九四八年に閉鎖になつて、その後でできたものだそうである。何故あの有名な実験学校が閉鎖になつたのか? 案内してくれた人は筆者に、実験学校という性格が子供の教育上好ましい条件でないことを発見したからであると説明してくれた。このナーサリー・スクールでは十二名の子供が二人の教師のもとに六名ずつ二組に分れていた。広々とした学校の室内体育場が保育室で、子供達はそのなかでただたのしく遊んでいる。教師は何も特別に教えようともしていないで、一緒になつて遊んだり、または自分で好きなピアノの曲でも弾いてさえるようである。十時半になるとジュースを、希望者だけに飲ませている。何も特別な保育案みたいなものは、一向にないようである。一人子供の母親らしい人が参観にきているが、大きい室の隅の方で本を読んでいる。十二時になると解散する。もとの実験学校は有名な学校であつたが、これはまた何と事もなげな保育であつた。先のワシントンの幼稚園の有様といひ、コロンビアのナーサリー・スクールといひこれは筆者には予期しないことばかりである。

この問題をもつて、筆者はコロンビアのチ

ーチャースカレッジの幼児教育の専門家ドリ  
スコル博士 (Dr. Driscoll) に会った。アメ  
リカでは、ナーサリースクールは無くならず  
、あるのかときいたら、そういう訳で  
はないが、三才未満の者はナーサリースクー  
ルには早過ぎる。その頃の子供は親の所にあ  
つて、直接その愛情と庇護の下にあるべきで  
あるという考えが、多くの人々によつて認め  
られるようになったというのである。これは  
ナーサリースクールが一才半か二才頃の早く  
から、生活習慣の躰の役割を引受けることを  
主張していた頃に比べると、かなりの変化で  
ある。筆者はこんどの視察中十幾つのナーサ  
リースクールを見たが、そのうちで二才児を  
——それもほんの数名だけ——預つていたと  
ころは二個所だけであつた。

### サンニイサイド保育所

コロンビアからの紹介で、筆者はそれから  
低収入地域にあるサンニイサイド保育所を訪  
れた。これはユニオン・セツルメントとい  
うセツルメント事業の一部をなすもので、  
コロンビアの学生の保育の実習の場にもなつ  
ている。第二次大戦が始まつて間もなく、切  
く母親のために開設せられたもので、保育の

費用は当時は、州と市と両親が各々三分の一  
ずつを負担していたが、現在は紐育市が三分  
の二、親の側で三分の一を負担している。戦  
時中は一週六日間朝七時半から夕方六時半ま  
で開所したが、現在は八時から六時になつて  
いる。子供を此処に預ける資格としては、一  
家の収入が一定額以下であることと、母親が  
働いていて子供の世話ができないか、または  
母親が病氣その他の理由で子供の面倒が見ら  
れない場合である。サンニイサイド・ナーサ  
リー・スクールとも呼んでいるようであるが  
、実際は保育所である。然し保育所と云つて  
も保育に幼稚園的な特長を持つている。子供  
を大きく二つに分けて、学令前のもの三才か  
ら六才までと、六才から十才までの学令期  
のものとし、前者が八五名、後者が九〇名、計  
百七、八十名の世帯であつた。学令期のもの  
は、正午の時間には弁当に帰ってくるし、学  
校がすむとまた帰つてきて母親が連れにくる  
までをここで過ごすことになつていた。幼児  
の方は七〇名を六つのグループに分けて、平  
均十二名一組とし、各グループに教師が一名  
づつ、そして最年少グループには教師が二名  
また最年長グループは十八名或いはそれ以上  
で教師が二名、中間の年令層のものは十三、  
四名一組として、教師が一、五名の割合で配属

せられている。教師は凡て大学出で、MA(修  
士)の称号を持つた人が何人かいた。そして  
男でMAの所有者が一人いた。教師の勤務時  
間は七時間半で、早出の人と遅出の人があつ  
て、中間の時間の所で多少重複するようにな  
つている。

この保育所は、貧困街のミスボラシイ建物  
の中にあり、室数も充分でなく、狭い中に家  
具や遊具や子供が、一ぱいつまつているとい  
う印象である。保育の状態は、大体伝統的な  
幼稚園またはナーサリースクールのやり方を  
時間的に引き延したようである。保育案に従つて、  
例えば九時から九時半まで戸外遊、十時か  
ら十一時十五分までお仕事、それからお話、  
十二時十五分屋敷、一時から三十分間休息、  
(屋敷をふくむ)その後は極めて緩まんな行  
き方で、三時—四時戸外、四時から帰宅まで  
室内というようになつてゐる。一つの組が使  
い得る狭い所が只だ一つだけで何もかもその  
一室でやる。教師の給料は普通の仕事より低  
いが、それでも挺身してやつてゐる。移民の  
子供たちがいるので、英語が全然分らない子  
供がいる。それに性格的な問題児がいる。し  
かしとても手のつけられないような問題児に  
は、保育所全般の利益のために、その子供を  
引受けられない旨を、はつきり母親に宣言す

るということである。子供には黒人の子供もいるし、十二人の教師の中には黒人の婦人もいた。そして一つ特長的なのは、コロンビアのMA称号を持つている男の先生で、ぶきつちよな格好であるが、なかなか子供を上手に扱っていた。男親のない子供達もあるようで、そういう子供達には男の先生もいと云つていた。

### バンク街学園

紐育では、ナーサリースクールを訪れるものは、バンク街学園(The Bank Street School)を見落すことはできない。ここは、有名なハリエット・ジョンソン・ナーサリースクール(Harriet Johnson Nursery School)があるところである。一九一七年教育実験所の名前で発足し、現在は教育学部とナーサリースクールと、研究及出版部などで組織せられていて、ナーサリースクールと保姆養成機関と、研究所を兼ねたようなものである。行つてみると、幼児教育の専門家のような人達があちこちと二、三人づつ参観にきている保育は全部室内で行われて、戸外活動のために屋上が使われている。

ここでは在来の伝統的な保育方法が多少濃

り厚に現われていた。歌をけいこさせたり、トミックのようなことをさせたり、お話をしたりしている。非常に上手な技巧であるが、かなり教師が先に立つて指導するという遣り方である。一つ面白いと思つたのは、子供を床の上をはわしたりはつて引つくりかえらせていることであつた。戸外で充分な運動をさせることができない子供達に、かなりの運動をさせることになつていたのであろう。屋上の運動場はまことに上手に経済的に使用せられていふと思つた。屋上のスペースを、低いかきによつて三つばかりに区分してある。小さい子供達のためのものと、多少大きい子供達のためのものと、多少異つた遊具が置いてある。区間と区間の間には通路はあるけれども、小さい子供達は自分の場所、大きい子供達から侵されなくて遊んでいる。この種のかきは、後で述べるように、エール大学でも見たが、いい思いつきであると思つた。全部の子供に一時に屋上を使わせることはできないので、かわるがわる室内から屋上に出している。屋上はずつと自由遊戯になつていようであつたが、この種のナーサリースクールでは、勢い多少こまかい保育案をたて、それを時間的にきちんと守らなければならぬ理由もあつてであらうか。保育全体の印象が

在来の伝統的な色彩を多分に持つていると思つた。ことに参観者が絶えずあるということ、は、きれいなあざやかな活動をして見せるような結果になつていゝのではなからうかと思つた。ちなみにバンク街学園のなかの教育学部には、昼間部と夜間部があるが、正規な学生は大学院程度で、大学院では修士の称号まで与えられることになつていゝ。

### エール大学附属

紐育の次はニウ・ヘヴンにエール大学のナーサリースクールを訪ねた。こゝではゲゼールに会つてその主さいする児童研究所を見ようというのが、主な目的であつたが、ゲゼールはエールを去つて、同じニウ・ヘヴンではあるが、ゲゼール発達研究所を開設してゐた。でエールの研究所は全く陣容を一変して研究のテーマも全くちがつて了つてゐる。ナーサリースクールはプロヴィンス博士に案内して貰つて、午前中をゆつくりと見学した。

三十名あるかないかの極く小さいナーサリースクールである。二才児も少しゐる。二才児と三才児の遊んでいる所を観察用スクリーンを通して見せて貰いながら、保育の方針を質問する。「私達は決して競争を強要しようと

はしません。そしてきまつた保育案などというものはありません。大体ただ好きなようにさせて置くんです。十時半頃ミルクとかチョコレートミルクとかを飲ませ、クツキイを与えます。教師がお話をしてやる時もそうきめてはいないで、適当と思う時に、してやるんですが、それも聞きたいと思う希望者だけが集まればいいんで、あとの者は好きなことをやらしておきます。喧嘩をすれば止めます。天気によければ表に出します。」というような話である。なかには専門の保姆が一人、それに大学院在学中の学生の実習生が三名いる。

ほんとに特別に何もしていない。ただ自然に遊ばしてある。そして「その自然の状態の中で社会生活に慣れるように、人との間の関係が適感できるように」ことを目的としていてと云う。教師が一人お話をしてやっています。果まつているのは数名だけで、あとは好きなことをして遊んでいる。オヤツがすむと戸外に出した。大きい子供のグループと小さい子供のグループの間には、かきかしてある。小さい方のグループが、大きい子供達のために乱されることのないようにと云うためだと云う。小さい子供達は、おもちゃの乳母車を押しているのが多い。大きい方はジャンピング・ボードに一人二人遊んでいる。

る。それからジャングル・ジムに四、五名登った。見ていると危なっかしいのだが、殆んど放任してある。あとになつて小さい方はスコープを持ち出して土を掘っている。教師は相愛らず、見ているだけで何もしていない。その間に心理学者と大学院の学生が観察のために現われる。教師は大きいグループでは六人に一人、小さい方では四人に一人の割合で——実習生も含めて——についている。ただし室内では、おやつ準備や片づけは子供にさせないで、教師がしている。「これを子供が働做して、自然のうちに習うように、というのが考え方で、且つこの年齢程度の子供にこんなことの難をすることはまだ早い」と仰しや

る。果团的活動については、小さい方の子供にはそう期待していない。大きい方ではおのずとかなり果团的になる。一緒に話しもきくし遊戯もする。「然し教師が先に立つて、果団をリードしたりすることはしない。そういうことをすると、子供達は教師がするのを待つて、事をするようになる恐れがある」と仰しやる（以上 Dr. Province の話）。

環境は広くて静かだし、教師も子供も極めてのんびりと遊んでいるといった風景である。小さい方の子供には時に教師に甘つたれ

るのがあるが、そう多くはない。筆者はこの保育の有様を見て、まるで今まで頭の中に画いていた保育とすつかり異なるものを見せつけられたのである。このたくまざる放りつばなしのように見えるやり方は、コロンビアでも一寸感じたのであるが——、これでいいんだらうか？ これで最上の教育効果が期待できるのだろうか？ 筆者は自問自答せざるを得なかつた。然し当事者たちは、そんな事には一向無頓着に、知らん風をしてやつていてという印象である。ただ筆者が一つ深く印象づけられたことは、子供達が伸び伸びとしてしかも興奮なしで（騒がないで）楽しそうに遊んでいた姿である。そして教師はその場面にいるかいないかのような存在であつたことである。

ルーミング・イン・ア  
レインジメント

エール大学の医学部はルーミング・イン・アレインジメント(Rooming-in Arrangement)で有名である。従来アメリカでは病院でお産をする時には、お産をしてみましょうと、母親の健康のためと、完全な衛生的な取扱いをするという意味から、子供を産婦の所から引き離してつて別室で世話をし、かつ母親の安靜

を守るために家族の者も母親の所へくることを許されなかつたものである。然るにこういう育児の方法が子供の精神衛生のために最善でないということが云われるようになって、その改善案として考えられたのがこのルーミング・イン・アレーンジメントである。この方法では赤ん坊は燐室へ寝かして、産婦の調子がいい限り赤ん坊を連れてきてお乳を飲ませたり、または抱っこしたりさせる。父親を始め其他の家族の者も病院の母親の室へ来ることを許す。それから授乳方法についても今から十五年位前までは、キチント時間通りに飲ませていたものであるが、現在ではかなり要求授乳法 (self-demand schedule) をとるようになっていた。余りきちようめに時間のことを言わないで、欲しがる時にやるというやり方である。こういう方法は我々日本人にとつては一向にめずらしい方法でもないのであるが、アメリカでは今新しい傾向として取り上げられている。そしてルーミング・イン・アレーンジメントに就てはエール大学の医学部はその最も熱心な唱導者となつてゐるものである。

### ハーヴァド大学附屬

エールの次ぎには、ボストンでハーヴァド大学附屬のナーサリースクールを見た。ミス・ライドンという園長さんに案内して貰つてかつ色々説明をして貰つた。小さい場所に遊具が沢山置いてあるし、子供がかなりいるという印象である。保育についてはかなりはつきりした計画を樹てているようで、二才児には主として大小便の自律を、三才児には着脱衣、自己表現、施設などを大切にすること、及び創造性を、四才児には物事を自分で考える習慣、社会的規準への適應、他人への考慮幼稚園になつて五才児には、字を読むレディネスなどを、訓練するようになどという計画である。そして保育案で時間をきめて、その時間割に基いた保育が行われている。これらの点でこのナーサリースクールはかなり依然伝統的な方法によつてゐるものである。

### アプデグラフ教授の見解

ボストンの次に、シカゴに行き、それからミネアポリス、その次にサンフランシスコと見て廻つたが、同じことを繰り返すようになる点もあるので、残りのうち、アイオア大学のナーサリースクールとミネソタ大学のナーサリースクールのことを、語ることにしよう。

アイオア大学はアメリカでも最も早く一九一七年に児童研究所を設立し、爾來四十年間に亘つて研究を継続している。ゲシュタルト心理学者クルト・レヴィンはその一統と共に、美事な研究成果をあげたところである。こういう問題は本文の範圍外に属するので、再び幼児教育の問題に帰るが、筆者は今迄視察してきた所で筆者の頭にこびりついてきたアメリカの幼児教育に関する幾つかの疑問を一括してぶちまけて見ようと思つた。アイオア大学の就学前児童教育の専門家アプデグラフ博士 (Dr. Ruth Updegraff) に面会すると、自分は端的にそれらの疑問を中心に質問した。

筆者「今から十年か十五年前のナーサリースクール及び幼稚園教育は、所謂生活訓練を主な目的の一つとしたのに対して、現在の就学前教育は専らその趣きを変えているかに見える。それは何の理由によるものであろうか？ その哲学的また心理的理由は何であらうか？ アメリカの現在のナーサリースクールは、その訓練を放棄したかにさえ見えるが。」

ア博士「我々は現在の就学前教育に於て決して訓練を放棄したのではない。我々は今も以前の通り、幼児の教育について注意深いのである。ただ我々は何が子供に、例えば克己

心を与えるかということに就て、以前とは異つた考えをもつている。克己心を教えるに就いて、以前とは異つた分野と面を考えている。以前よりも進んだ考えで、これは臨床心理学の教える処から学んだものである。

子供達の動機(Cealth)は何であるか？ アメリカの文化では、嘗て我々は児童に対して奇妙な要求をしたものである。例えば子供は決められた時間通りに食事をし睡眠をした。それは児童が決めたものではなくて、大人が決めたものである。誕生後二カ年の間でも我々は赤ん坊に対して、驚くべき苛くきな要求をしたものである。非常にげん格な大小便の自律の訓練をしたり、急げきな離乳などをさせたものである。しかも親達はそれをもつて子供の利益になるものと考えていた。然し大小便の自律の如きは、筋肉の充分な発達がなくしては、容易くできるものではない。その他こういう事情が幾つも存在している。これでは我々は子供の躰と訓練について、今迄よりモット注意深くなり始めたのである。

誕生後六年間で、大体性格の型ができ上つてくる。子供達には、彼らが習い得るだけ教えよう。彼らが学び得るものに力を集中し、その限度を超えないようにしよう。無理な要求をして、能力以上のことをさせようとする

と、子供達の社会に対する適応に関連してフラストレーション(欲求不満)が生れるであろう。大体満六年位経つた時に、我々は子供達に対してはつきりした躰を要求しようとするのである。

二才—四才位の間に於ては、子供はなかにある蒸気を吐き出させる必要がある。即ちそれは安全弁の機能である。子供にはその安全弁を持たせていい。だから子供は喧しう騒いでもいいし、実験的な話し方をしてもいいし、キタない遊びをしてもいい。それは安全弁的な価値を持つのである。また子供は粘土積木やその他のものをもつて創造的活動をなし得るのであるが、この創造的活動こそ子供の感情発達のために大なる価値を有つものである。三才—四才になれば、感情的うつ散のために、事物を与えて、積極的な—消極的、破壊的などに相対して使われている—活動をさせようとする。我々中流階級の文化に於ては、我々は進取性、侵略的行動に対して、それを処罰すべきものと考えてきた。子供達は他人を傷けることは許されない。然し彼らは物をこわすことはしていいであろう。我々は子供達を処罰しないで、彼の感情を受け入れてやるべきである。そして積極的な事物積極的活動をさせる事物を与へべきである」。

「ナーサリースクールにおける年令に就ては、我々は子供が二才半かそこいらになるまではやらない方がいいことを学んだ。それ以前に於ては、子供は家庭でもつて極めて安定感を持つている必要がある。子供が家庭で安定感をもつた時に始めて、ナーサリースクールにゆく準備ができていくと考へべきである。ただ母親が仿っている場合は、ナーサリースクールの方が子供にとつて、より安定的な場所であるかも知れない。五才児が小学校に上ることについても、同じような問題がある。ある州では一九五二年以後は、五才児の就学を禁止する法律を制定したが、前述のような理由から肯けることである」

「ナーサリースクールの教師については、大体子供八人について一人位であるが、五才以下の子供については、子供の数の如何を問わずいつでも二人の大人がいることが必要であると思う。」

「ナーサリースクール及び幼稚園の教師の養成については、次のような項目について訓練を与える必要があると思う。」

- ① 性格発達
- ② 児童心理
- ③ 両親教育
- ④ 小学教育
- ⑤ 子供の身体の発達
- ⑥ 児童の栄養
- ⑦ 社会性の発達
- ⑧ 普通児の臨床心理的問題
- ⑨ 心理テスト(プロジェクト)

ストをふくむ) ⑩美術 ⑪カリキュラム

## アイオアとミネソタ附属

アプデグラブ教授の許を辞してから、アイオア大学附属のナーサリースクールを參觀した。このナーサリースクールも亦、エールのそれのように、ゆうゆうと遊ばしてあつた。まだかなり寒かつたが大部分の子供は戸外の広々とした庭で遊んでいた。ここには極く少数の二才児がいた。そして教師の一人は大学院の男子の学生であつた。ミネソタ大学のナーサリースクールは、児童研究所の附属になつてゐる。ここはまた午前九時から午後三時までの長時間に亘つてこまかいプログラムに従つて保育をしている。どちらかと云えば伝統的な色彩の強いナーサリースクールであつた。

## 結 び

筆者はこれ以上參觀記をつけ加えようとは思わない。この辺りで見て廻つた印象を総括しようと思つた。前述のように、幼児教育は筆者にとつて今度の視察旅行では、第二次的なものであつたがために、見学したナーサリースクールや幼稚園が偏つたことになつた。自

分が訪問した大学附属のものが多くなつて了つた。その意味から筆者の見たところをもつて、アメリカの幼児教育一般の印象であるなどとは決して云えるものではない。然しある意味では、大学附属であることのために進歩的なものが多かつたかも知れない。こういう条件に於て見たアメリカの幼児教育は、筆者が嘗て知つて見た幼児教育、及び第二回の渡米前に画つていた幼児教育とは大分趣を異にしてゐると云ふことである。すくなくともそういう方向に向いつゝあるものが多いことを感じさせられた。ナーサリースクールは四才まで、幼稚園が五才児の保育であることは、本誌の読者には申上げる必要もないことと思うが、嘗て一才半位からさへの教育を考えたアメリカのナーサリースクールは今や大体三才からのものが大多数になつてきた。時々二才児を収容している所もあるが、そういう意味では日本の幼稚園児の年令と大体同じようになつてゐる。ナーサリースクールが低年令の者を切り捨てたことによつて、幼稚園とナーサリースクールの異う所が大ぶん無くなつてきている。もしありとすれば、幼稚園の小学校の学習へのレイネスの点であるうが、それも見ていて一向に違わないような印象を受けた場合もある。

ナーサリースクールが、時にデイ・ナーサリイ即ち保育所と混同して用いられている場合があるようであるが、大学附属のものについては、はつきり保育所とは異つた存在となつてゐる。また保育所が幼稚園またはナーサリースクールのな教育を与えようとしてゐる例を、一つあげて置いたが、結局よい保育所は、幼稚園及ナーサリースクールの教育面を取り入れることになるのが自然であることを一例に思う。

この視察中筆者を最も驚かしたのは前述の如く、保育とくに躰に関する考え方が變つてきた、または變りつゝあるのではないかと云う点である。この点については更に前述したことを繰り返すことをしないが、その精神を要約すると、次のようなことになるのではないかと思う。

(一)教育が生活と一緒になるというジョン・デウィイの精神が、結局幼稚園及びナーサリースクールにまで拡大浸透してきたのである。幼児の生活をその儘にして、教師が横から不自然に手伝ふことなくして、子供達だけの世界で、教育が自然に行われることを期待してゐる。子供が、自由に遊び乍ら子供の世界の中心で、人に接し、人を取扱ひ、自分の感情を



しい。恐らく気の合つた同志数人ずつ、各室に分れて静かに休んで、疲れを癒したかつたのであろう。そこに吾々は、何か考えさせられるものがあるように思われる。保育所によつては、定まつた所謂自分らのホームルームがなく、大工場のように、大きな一つか二つの室で、朝から晩まで大勢の子供を一緒に、幾人かの保育の共同指導によつて、一斉に動かし、一斉に遊ばして居るところがある。それでは、家庭の生活から遠ざかることになり子供等は安住するところもなく、生活の中心点もなく、精神的に満されない所が多いことであらう。

殊に養護施設や精神薄弱児施設、教護院などの収容施設は、全然家庭から離れて居る子供達であるから、特に家庭に代る施設でなければならぬ。乳児院などで、大きな室に沢山のベットを並べ、一方から順々定まつた通り授乳し、おむつの取替えをするというだけでは、子供等には満されないとばかり多いことと思ふ。或る養護施設では、大きな寮に代るに、住宅に做つた小さな独立家屋をいくつも建て、住宅毎に、保母中心の家庭的雰囲気を作つて、その中に生活をさせ、周囲の空地をその家の菜園として耕して居る所がある。このやり方に大きな暗示を受けざるを得ない

保育所の場合も、保育室が住宅式に出来たら申分ないと思ふ。保育所の施設の大小は、そのよし悪しを決定する条件ではなく、その運営が家庭化されているかどうかによつて、定まるものだと考える。尤も私の主張する、ホームルームとしての保育室の運営も、子供等のすべての生活を、そのホームルームだけに限るといふのではない。大人の社会にも、町内運動会や講演会、音楽会などが催されるように、保育所の隣組の子供等が一緒になつて踊り歌い、紙芝居を見、遠足にも出かけるというようなことがあつてもよいし、それは広く社会性を養う意味において、却つて望ましいことではあるまいか。要は保育に欠ける子供達を、ノーマルな家庭に近い保育所で保育し、各家庭の保育で欠けるところを補つて、円満な人格形成の基礎を養いたいというに他ならない。

(福島県立高等保母学院)

(13頁から)

支配することを学ぶことを期待している。

(二) いわゆる知的活動以外の、社会生活、感情生活、自分自身についての考、他人に対する反応の方法について学ぶことを、最も基本的なものと考えるようになったのではないであらうか。少くとも今迄以上にうんと重要視するようになっていふと思う。遊戯や歌やお話などよりも、右のような点について学ぶことを最重要視するからこそ、歌や話を特に定期的カリキュラムの中に入れることをしなくなくなつていふんだと思ふ。

(三) 児童の発達の条件を今迄以上に、考慮するようになっていふ。それ故に、今迄行われていた躰の方法を棄てたり年令的に繰り下けたりしてゐるのである。そして臨床心理学が強調するようになった「幼児期に於ける安全感又は安定感こそ児童の将来の精神的健康を支配する可能性が多い」という考え方を、躰、広く幼児教育の多くの面に於て採択するようになったものである。

(筆者日本女子大学教授)